談話における近接性
——指示代名詞の選択における導管メタファーの影響——

辻本智子

1. はじめに

(1) の 'that' や (2) の 'this' のように、あるまとまりをもった談話のかたまり (chunk of discourse) を指示して用いられる指示代名詞は、しばしばディスコース・ダイクシス的用法と呼ばれる。

(1) A: I've never seen him.
B: **That**'s a lie.

(2) Many publishers are trying to save money by making editors redundant. **This** affects fiction authors particularly.

この種の this/that の選択の基準として、従来種々の要因が提出されてきた。本稿ではそれらに加えて、談話を一種の「導管」と捉える「導管メタファー」が作用していることを明らかにしたい。指示代名詞をディスコース・ダイクシス的に用いるとき、話し手[1]は指示対象との距離を非物理的に、つまり比喩的に捉える。その比喩的距離の尺度として、従来提出されてきた要因を第2節で整理、考察する。第3節においては、従来の枠組みでは説明しきれない事例を分析し、それらが「導管メタファー」に基づいて生み出されることを論じる。

2. ディスコースにおける近接性

空間ダイクシスとは違い、ディスコース・ダイクシスではダイクシスの中心、すなわち話し手から指示対象までの距離は比喩的にしか測ることができない。したがってディスコース・ダイクシスにおける近接性の尺度として、様々な種類のものが想定される。ここではそれらを時間的近接性、感情的近接性、情報との近接性、談話焦点との近接性の4つに分類する。

2.1 時間的近接性

ある談話のかたまりを時間軸上の存在とみなすことは、ごく自然である。談話における「現在」により近いものを this 、遠いものを that で指示する。this を「後者」、that を「前者」とする慣用的用法はこの尺度にぴったりあてはまる。また、 Halliday & Hasan (1976) や Fillmore (1997) は、過去に起こったできごとは that と、これから起こりそうなことがらは this と結びつく傾向があると述べる。

(3a) We went to the opera last night. **That** was our first outing for months.

(3b) We're going to the opera tonight. **This**'ll be our first outing for months.

Halliday & Hasan (1976: 60)

Fillmore (1997) はさらに、 (4a) と (5a) はそれぞれ (4b) と (5b) より容認性が高いという。

(4a) **This** has been an interesting course.

(4b) **This** was an interesting course.

(5a) **That** was a brilliant lecture.

(5b) **That** has been a brilliant lecture.

しかし、ここで注意が必要だ。文法的容認性と形式的結びつきの使用頻度とを混同してはならない。this は動詞の過去形より現在形や未来形とともに用いられることが多いだろうが、過去形との組み合わせも (6) のような文脈においてなら、全く自然である。

(6) A little over two years ago I wrote a column for *Weekly ST* urging particularly young people -- to go to Okinawa. **This** was when the Okinawan people's movement against U.S. military bases there was rapidly gaining power.

[*Weekly ST* 29 May 1998]

この筆者は２年前にあるコラムを書いた。そのことを現在の視点で述べるに際して、２年前のできごとをダイクシスの中心に据え、this で指示した。何ら文法的容認性を下げる要因はない。

単文より大きな談話の分析においては、少なくとも２つの時間軸を想定する必要がある。ひとつは物理的世界の物理的時間の流れ。もうひとつは談話がつむぎ出されていく、いわば談話時間の流れである。(3a) や (3b) のように物理的時間に沿って談話が流れると解釈できる場合もある。他方、(6) のように過去のできごとが並べかえられて、談話の流れの先頭にくることもある。時間的近接性という基準は、前者のタイプの物理的時間と並行する談話においては有効だが、後者のタイプにおいては必ずしも有効とは限らない。その理由として、他の近接性の尺度との関連が考えられる。談話における「現在」とは、ほとんどの場合談話の「焦点」 (2.4 参照) を含んでいる。したがって、その焦点と指示代名詞の指示対象が一致するとき、時間的近接性よりも談話焦点との近接性の基準が優先するのではないか。談話焦点との近接性については以下で述べる。

2.2 感情的近接性

一般に人は好ましい対象に近づきたいと欲し、疎ましい対象を遠ざけたいと願う。ゆえに話し手が指示対象に対して親近感をもつときには this が、嫌悪感をもつときには that が選択されるという説明には説得力がある。Lyons (1995: 310) は、この感情的距離感を次のように解説する。

(7) [I]f speakers are holding something in their hand they will normally use 'this', rather than 'that', to refer to it. If they say *What's that?* in such circumstances, their use of 'that' will be indicative of their dislike or aversion: they will be distancing themselves emotionally or attitudially from whatever they are referring to

Chen (1990) は、Tregidgo (1984) から (8) の例を引いて、ディスコース・ダイクシス的用法の that にも指示対象を感情的に遠ざける効果があると指摘する。

(8) A: I've been to the North Pole.
B: On what occasion can that ever happen?

Chen によれば、(8) の 'that' は、話し手がその指示対象、ここでは相手の言、に対して不信感を抱いていることを示す。しかし、(8) から読み取れる話し手の不信感は

that の使用によってのみ示されているのではない。文の形式もまた関与している。(8) を (9) と書きかえてみれば明らかなように、イントネーションを考慮しないとすれば、(9) の 'that' からとくに際立った不信感は感じられない。別の基準に基づいて、つまり情報との近接性により、相手の言を that で指示するものと考えられる。

(9) A: I've been to the North Pole.
B: When did **that** happen?

また、this が常に親近感を表すとも限らない。(10) は米軍基地問題に関するコラムだが、筆者は 'this' の指示する内容に対して、明らかに親近感とはほど遠い感情を抱いている。

(10) Similarly, the Matsubara Board of Education is telling us that the way for schools to remain neutral on the bases issue is to keep students in ignorance of what bases are.

This is not neutrality, it is a cover-up.

[*Weekly ST* 29 May 1998]

上の 'this' の指示対象はこの時点で談話の中心にある。自分が嫌悪感を抱く対象を this で指示しているのは、感情的距離よりも談話の焦点との距離が優先された結果と考えられる。

自分が手の中に持っているものを this ではなく that で指示すれば、そこに指示対象への嫌悪感が示される。たしかにそうだ。ただ指示対象が談話のかたまりである場合、このパタンが単純にあてはまらない場合も多い。

2.3 情報との近接性

一般に this は話し手が自分自身の発言を指示して用いられ、 that は相手、または自分以外の発言を指示する傾向がある。この基準を、指示対象となる談話のかたまり (chunk of discourse) を情報とみなし、情報との近接性と考える。 (11a,b) や (12) がその典型例だ。

(11a) There seems to have been a great deal of sheer carelessness. **This** is what I can't

understand.

(11b) A:There seems to have been a great deal of sheer carelessness.

B: Yes, **that**'s what I can't understand.

Halliday & Hasan (1976: 60)

(12) Dick says that the Republicans may have credibility problems. **This** is an understatement. Lakoff (1974: 349)

Lakoff (1974: 349) は、直前の相手の発言を this で指示することはできないと述べる。したがって (12) では2つの文が同一人物による発言である場合に限り、 'this' の使用が可能になる。自分の発言は「近く」、相手の発言は「遠い」とする基準だ。

Gundel et al. (1993: 279) もまた、this の指示対象は話し手によって談話に導入されたものでなくてはならないと述べる。

(13) Both determiner and pronominal *this* requires the referent to be not only activated, but speaker-activated, by virtue of having been introduced by the speaker or otherwise included in the speaker's context space.

しかし、 この基準では (14) のように自分の発言を that で指示する場合や、相手の発言を this で指示する場合を説明することができない。

(14) Do you know why she married him? Because he's rich. **That**'s why.

とくに自分の発言を that で指示する事例は数も多く、きわめて自然だ。それは、たとえば (11a) の 'this' を that と入れ換えても何ら不自然ではないことからも理解できる。

Fillmore (1997) はこの矛盾を、指示対象が「誰の発言か」ではなく、「誰が知っているか」を基準にすることによって解決できると主張する。 this は、発話の時点において、話し手は知っているが聞き手は知らない情報を指示する場合に用いられる。これに対して that の指示対象は、話し手・聞き手の双方が知っている情報だとするのである。

(15a) **This** is my explanation.

(15b) **That** was my explanation. Fillmore (1997: 105)

(15a) の話し手は 'this' の指示する内容を知っているが、聞き手はこの時点ではまだ知らない。これに対して (15b) の 'that' は、この時点ですでに話し手だけでなく、聞き手も知っている内容を指示しているというわけだ。Ariel (1990: 53) もまた Fillmore (1997) と同じ考え方を accessibility という概念を用いて次のように説明する。

(16) *That* requires identifiability by both speaker and addressee, whereas *this* sometimes refers to objects accessible only to the speaker.

たしかにこの知識・情報の所有関係に基づく説明は、that の後方照応的用法が、this のそれに比べてきわめて稀であることと合致する。しかし、話し手にとっては相手が知っていようがいまいが、自分の知識であることに変わりはない。同じ内容を聞き手が知らないときには this で指示し、相手が知ることによって that に変えて指示する構造が見えてこない。相手が知ることによって、同じ指示対象が「遠く」なるのはなぜか。それに Fillmore (1997) のあげた (15a) と (15b) における指示代名詞の選択は、話し手と聞き手の知識というよりはむしろ、時間的近接性を軸にしてなされたと考えるほうが自然ではないだろうか。

以上のように情報の近接性という基準では、自分の発言を指示する that と相手の発言を指示する this の用法を説明できないことが明らかになった[2]。こられを生み出す構造を解き明かす、何らかの別の基準を想定する必要がある。

2.4 焦点との近接性

焦点 (focus) という語には様々な定義が与えられているが、本稿では Gundel et al. (1993) にならい、'center of attention at the current point of discourse' とする。

指示表現としての指示代名詞が、焦点移動 (focus shift) を示すという考えがある。this は指示対象が焦点内に入ったことを示し、that はそれが焦点の外に出たことを示す。このことを最初に指摘したのは、Linde (1979) といっていいだろう。この論文は、住宅の間取りを説明するある談話における代名詞の使用を分析したものだ。Linde によれば、たとえば (17) の 'that' は指示対象である 'hallway' がもはや焦点内になく、焦点外に移動したことを示している。ここで焦点内にあるのは、'the kitchen' なので

ある。

(17) You entered into a tiny little hallway and the kitchen was off **that**

この分析を ディスコース・ダイクシス的 that にそのままあてはめる研究もある[3]。

たとえば McCarthy (1994) は Linde (1979) から (18) の例を引き、 (19a,b) のように述べる。

(18) You walk into my apartment and you walk down a long thin hall of garbage. Actually, **that**'s a lie. It's not full of garbage anymore.

(19a) *that* refers across the current focus to entities or foci that are non-current, non-central, marginalizable or other-attributed

(19b) *this* signals a shift of entity or focus of attention to a new focus

Chen (1990) もまた (20) の 'that' は、その指示対象についてはこれ以上言及しないという話し手の意志を表すと述べる。

(20) ...would sort of fork left at the top of the street and go for a mile or so and you get to Moccas, **that** is all I can remenmer.

焦点との近接性という基準が、他の３つの基準よりも強力で、ときに優先されることは間違いない。たとえば、先に取り上げた 2.1 の (6) では、感情的近接性よりも焦点との近接性が優先された結果、話し手が嫌悪感を抱くできごとに this が選択された。 2.2 の (10) では、指示対象が時間的に隔たったできごとにもかかわらず、談話の焦点内にあるため this が選択された。つまり、焦点との近接性が時間的近接性に優先した結果だといえる。

that は 談話の焦点外へ出た対象を指示し、this は新しく談話の焦点内に入ってくる対象を指示するという考えに従えば、前節で言及した、自分の発言を指示する that と相手の発言を指示する this の問題も一見解決できそうに見える。自分の発言であっても、もはや焦点外にあることを that の使用によって示し、相手の発言でもそれが焦点内に入ってきたことを this によって示すというわけだ。しかし、実際には (21)

や (22) のように 'that' の指示対象が焦点外のものとは解せない事例も多いのだ。

(21) Fishing. **That**'s what I enjoy very much.

(22) You and Drew must go to Los Alamos for tests. The doctors there know all about uranium and radioactive dust. We will pay for the journey and the tests. But we know that you've stolen some uranium. **That**'s why you were so radioactive.

[British National Corpus Sampler CD-ROM]

ここではむしろ、指示対象が焦点内にあることを強調するために 'that' が用いられている。また、(23) のように一度 'that' で指示された事柄が、つづいて談話焦点を示す代名詞 'it' で指示されるという事例も決して不自然ではない。結局焦点との近接性によっても、このタイプの指示代名詞は十分には説明できないのである。

(23) Mel Brooks said humor or comedy is different from tragedy in that tragedy is, if I cut my finger, it hurts, it breeds, it's terrible. I have to go into the hospital, I have to be checked for tetanus. Comedy is if someone else gets hit by a bus and dies. **That**'s funny because it happened to them.

[*English Journal*, Oct. 1996, cited in Suga 1997]

以上、ディスコース・ダイクシス的指示代名詞の選択に関与する4つの近接性の基準について考察した。その過程で、4つの中でも焦点との近接性の影響力は強く、ときに他の基準よりも優先されることが明らかになった。また、従来の基準では説明できないタイプの this と that が明らかになった。自分の発言を指示する that と相手の発言を指示する this である[4]。この類は、情報との近接性とも談話焦点との近接性とも矛盾してしまう。第3節では、このタイプの this と that の選択に関わる新たな近接性の基準を提案し、その有効性を論じる。

3. 指示代名詞の選択における導管メタファーの影響

新たな基準として、導管メタファー (conduit metaphor) に基づく近接性を提案する。この基準は、基本的には情報との近接性の一種と位置づけられる。従来欠けていたコミュニケーションの動的な側面をカバーし、談話における近接性の柔軟さを説明できる基準である。まず 3.1 において導管メタファーについて概説し、3.2 では実際の談

話の分析を通して、その有効性を明らかにしていく。

3.1 導管メタファーとは

Lakoff を中心とする概念メタファー研究の発展において、導管メタファーは、もっとも明確でかつもっとも確立された概念メタファーとして、中心的な役割を果たしてきた。我々はコミュニケーションを、一種のパイプを通して小包を送ったり受け取ったりするプロセスに見立てる傾向がある。こうした物の見方を導管メタファーと呼ぶのだが、最初にこのメタファーの存在を明らかにし、このメタファーが我々の言語使用にいかに大きな影響を及ぼしているかを示したのは Reddy (1979) である。

たとえば、コミュニケーションがうまくいかなかったとき、英語では (24a~c) のように表現することができる。

(24a) Try to **get** your thoughts **across** better.

(24b) None of Mary's feelings **came through to** me with any clarity.

(24c) You still haven't **given** me any idea of what you me.

これらの文にメタファーが潜んでいるとは意識されないかもしれないが、これらを「文字どおり」に解釈することはできない。Mary の感情が実際に我々のところまで「やってくる」わけではないし、考えを誰かに「手渡す」こともできないのだから。導管メタファーがこれらの表現を可能にしているのだ。日常の言語使用において、このメタファーの作用が意識されることはほとんどないだろう。それほど我々の認知システムに内在化されたものであるといっていい。

Reddy (1979: 170) は、導管メタファーを以下のように４つの局面に分解する[5]。

(25a) Language functions like a conduit, transferring thoughts bodily from one person to another.

(25b) In writing and speaking, people insert their thoughts or feelings in the words.

(25c) Words accomplish the transfer by containing the thoughts or feelings and conveying them to others.

(25d) In listening or reading, people extract the thoughts and feelings once again from the words.

言語によるコミュニケーションを行う際、我々は考えや思いを言語という入れ物に詰め込み、それを一種のパイプを通して相手に送る。受け取った側は、相手が詰め込んだ考えや思いを言語から取り出すわけである。

導管メタファーにおいては言語を入れ物、意味をその中身とみなすメタファーも重要なのだが、ここではこのメタファーはこれ以上扱わない。談話における近接性に直接関係する (25a) を、狭い意味で導管メタファーとして取り上げる。これを簡単に図示すると図１のようになる。

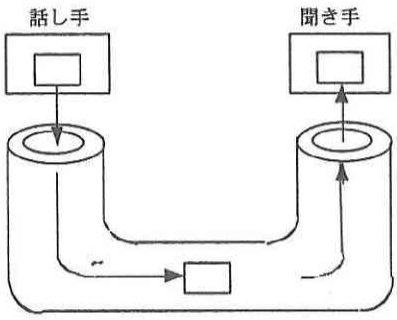

図１

自分の発言を「遠い」、相手の発言を「近い」と認識させるのは、まさに図１のような枠組みだといえる。自分が発したメッセージが導管を通って、相手側に到達したとみなせば「向こう側」にあるのだから that で指示するのが妥当となる。逆に導管を通ってきた相手のメッセージが「こちら側」に届き、自分が受け取ったと考えるなら、this で指示するのも妥当である。この枠組みにおいては、指示対象となる「情報」は一箇所に留まらず、導管を通って移動する。自分の発言という、通常話し手にとってきわめて近接性の高い対象を that で指示することで、この「移動」つまり「メッセージの送信」が完了していることを示しているといってもいい。以下ではこのモデルに基づく近接性が、個々の事例においてどのように作用しているかを見る。

3.2 文脈の中の導管メタファー

導管メタファーに基づく指示代名詞が現れる文脈には、図１にみられるような話し手から聞き手への情報の流れが鮮明に読み取れる。(26) は手首を骨折したらしい A が、医者に電話をしている場面である。

(26) A: Can I see Dr Keaveney? I think I've broken my wrist.

B: He's with a patient at the moment. But he can see you in about 15 minutes. Is that OK?

電話の応対をしたBの「１５分くらいしたら診てもらえるだろう」という言葉は、メッセージをつめこんだ小包みとなり、導管を通って受け手のAのところへ送られる。Bは自分の直前のセリフに 'that' で言及するとき、その指示対象であるメッセージがすでに受け手のもとに届いていると捉えているといえる。導管を間にはさんで反対側、つまり「あちら側」「向こう側」ということになり、自分の発言であっても that が選択されるわけだ。

(27) では死産を繰り返す母親が、医師に不安を訴えている。 that の使用は、彼女のメッセージが導管の向こう側に届いているのを強調しているとさえいえる。

(27) 'Three dead children is all that I can stand, don't you realise that?'

[Roald Dahl, 'Genesis and Catastrophe: A True Story']

相手の直前の発言を this で指示する事例も、頻度はぐっと低くなるが存在する。(28) では Rosine が探偵に、彼女が婚約者の Maurice Lettissier ではなく、 Glyn を愛しているのだと打ち明けている。

(28) 'By then I had already met Glyn, and beside Glyn, Maurice was shallow. Papa arranged a dinner party with the Leittissiers - a real ordeal - when I was supposed to succumb to Maurice's endearing personality. I did not. He was amusing, attentive to me and paid me compliments, but he couldn't compare with Glyn.'

'Did you say this to your parents?'

[Peter Lovesey, *Bertie and the Crime of Passion*]

探偵は Rosine の告白を that で指示することも可能だが、this を選択することで、彼女のメッセージがたしかに彼のところに届き、彼がそれを受け取ったことを明示している。(28) の 'this' に Rosine への親近感が感じられるとすれば、それはこの受け取りの確認という側面の強調によるのではないか[6]。

書き言葉においても、導管メタファーに基づく指示代名詞は書き手から読み手への

情報の流れが顕在化する文脈に見られる。

(29) By the time you read this, Power PC partner IBM will have announced a major breakthrough in Power PC technology. By next year, there will be Power PC chips running at 1 gigahertz - **that**'s 1,000 megahertz - thanks to an IBM innovation that uses copper instead of aluminum to make computer chips.

[*Macworld* April 1998]

(30) In 1996, Britain published more than 100,000 books. Ten per cent were fiction, and half of those were new fiction. **That** works out at 5,000 new fiction books a year. [*BBC English* April 1998]

(29)、(30) では書き手は一旦自分が読み手側に送ったメッセージを 'that' で指示し、それに補足説明を加えている。すでに相手側に送った情報だから、導管の向こう側にあるとみなし、 that で指示する。 *that is to say* というイディオム表現は、まさにこのタイプの典型例だ。

自分の発言を指示する that は先に (14) や (22) で見た疑似分裂文や、*that's all*、*that's that* などのイディオムにも多く含まれるが (cf. Tsujimoto 1998)、相手に情報を送ることを give で表すイディオムもある。「その点は確かにそうだ」という意味の *I give you that* がそれだ。(31) では「大した役者だよ」というメッセージを導管の向こう側に送ったとみなし、それを 'that' で指さすことでさらに確認・強調する効果がある。

(31) 'You're a bloody good actor, sir, I'll give you **that**...'

このイディオムには、*Don't give me that* という相手の発言を that で指示するパタンもあり、こちらは導管メタファーには基づいていない。

(32) A: I haven't seen him for about a year.

B: Don't give me **that**. I saw you with him yesterday. I drove right past you!

(32) の 'that' は、相手の発言をあくまで相手に帰属するもの、「遠い」ものとみなす

認識を示している。ここには、話し手から聞き手への情報の移動は読み取れない。この that の選択は、情報の発信者を基準にしたものであり、コミュニケーションの動的な側面は反映されていない。

(31) と (32) に見られる相反する近接性の基準が、ひとつの談話において隣接して現れたとしても何ら不自然ではない。 (33) では、双方が同じ対象を 'that' で指示する。話し手は聞き手に受け取りを迫るのだが、聞き手はあくまでその対象が相手の側にあることを強調して 'that' を使う。

(33) 'I'm going to tell you something, Mrs Saunders,' he said, 'something that you won't believe.' He put his hands on top of the fence and peered at her intently through his thick spectacles. 'You have, this evening, cut a basketful of roses. You have with a sharp pair of scissors cut through the stems of living things, and each rose that you cut screamed in the most terrible way. Did you know **that**, Mrs Saunders?'

'No,' she said. 'I certainly didn't know **that**.'

[Roald Dahl, 'The Sound Machine']

(33) では、2人の認識の違いが指示代名詞の選択に反映されているのがよくわかる。

コミュニケーションには、常に少なくとも話し手と聞き手の2つの立場があり、情報のやりとりに関して双方がいつも同じ認識をもつとは限らない。立場の違いから、全く逆の認識をもったとしても不自然ではないのである。従来提案されてきた情報との近接性は、いわば聞き手の立場に基づいていた。聞き手からみて話し手の発言を「自分のものではない」、「遠い」対象と捉え、あくまで相手に帰属するものと見る。それに対して、導管メタファーに基づく基準は、メッセージの送信者としての話し手側の認識、つまり送ったメッセージを相手が受け取り、正しく理解し、受け入れることを期待する心理を反映しているといっていいだろう。

4. むすび

談話のかたまり (chunk of discourse) を指示する際、 this と that のどちらを使うのか。この選択は、話し手がその指示対象に対してどのような距離感をもっているかによって決まる。指示対象が先行する (または後行する) 談話であるから、客観的な距離感ではなく、主観的・比喩的距離感だ。本稿では、まずこれまで断片的にしか論じ

られてこなかった、談話における比喩的距離・認知的距離の基準を分類し、その有効性を考察した。そして情報との近接性のひとつとして、新たに導管メタファーによる距離の基準を導入した。それにより従来は看過ごされてきたコミュニケーションの動的側面をカバーし、自分の発言を that で指示する場合や相手の発言を this で指示する場合に、話し手が指示対象に抱く距離感をうまく説明できることを確認した。

メタファーは文法規則と違い、相反する方向性のものも排除しない。その点でディスコース・ダイクシス的指示代名詞の選択といった、文脈に影響されるきわめて動的で微妙な事象の分析に適しているといえるのである。

【注】

1 本稿における「話し手」は「書き手」をも含むものとする。同様に 「聞き手」には「読み手」含まれる。

2 この種の that を it との関連で説明する Kamio and Thomas (1999) の論考も示唆的である。

3 Linde 自身はそれほど単純ではなく、ディスコース・ダイクシス的な (18) の 'that' を一種の metastatement であり、談話の流れの中心から一旦外れるものではないかと述べる。

4 相手の発言を指示する this のみなら、焦点との近接性によって説明することも可能と思われるが、あくまで this と that の双方を説明できる基準が存在することを前提とする。もちろん２つの近接性の基準が部分的に重なることは、何ら問題ではない。

5 Lakoff and Johnson (1980) や Grady (1998) は、これとは違ったやり方で、導管メタファーをさらに基本的な概念メタファーに分解している。

6 このタイプの this に関して、「話し手が聞き手の立場に立っていることによる」とする説明もある。指示対象であるメッセージではなく、話し手が移動するという考え方だ。もしこの説明を採用するなら、自分自身の発言を指示する that に関しても、「話し手が聞き手の立場に立って自身の発言を指示する」と説明できなくてはならない。しかし、that の使用に関して話し手が移動するという説明は、どうしても不自然と思われる。

【引用文献】

Ariel, M. 1990. *Accessing noun phrase antecedents*. London: Routledge.

Chen, R. 1990. English Demonstratives: A case of semantic expansion. *Language Science* 12: 139-153.

Fillmore, C. J. 1997. *Lectures on deixis*. Stanford: CSLI Publications.

Grady, J. 1998. The "Conduit metaphor" revisited: A reassessment of metaphors for communication. In J.-P. Koenig ed. *Disourse and cognition: Bridging the gap*, 205-218. Stanford: CSLI Publications.

Gundel, J., N. Hedberg and R. Zacharski. 1993. Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language* 69 (2): 274-307.

Halliday, M.A.K. and R. Hassan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.

Kamio, A and M. Thomas. 1999. Some referential properties of English *it* and *that*. In A. Kamio and K.Takami eds. *Function and structure*, 289-315. Amsterdam: John Benjamins.

Lakoff, G. and M. Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, R. 1974. Remarks on 'this' and 'that'. *Chicago Linguistics Society* 10: 345-536.

Linde, C. 1979. Focus of attention and the choice of pronouns in discourse. In *Syntax and semantics 12: Discourse and semantics*, 337-54. New York: Academic press.

Lyons, J. 1995. *Linguistic Semantics: An introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.

McCarthy, M. 1994. *It, this* and *that*. In M. Coulthard ed. *Advances in written text Analysis*, 266-275. London: Routledge.

Reddy, M. J. 1979. The conduit metaphor: A case of frame conflict in our language about language. In A. Orthony ed. *Metaphor and thought*, 164-201. Cambridge: Cambridge University Press.

Suga, A. 1997. Centering and discourse functions of referring expressions. *Annual reports of faculty of letters at Nara Women's University* 41: 59-73.

Tsujimoto, T. 1998. The conduit framework in discourse deixis: A communicative approach. *Proceedings of the second colloquium of the Discourse Anaphora and Anaphora Resolution*: 221-229.